

『広報 かるまい』

Hospital — 軽米病院だより(抜粋) —

岩手県立軽米病院長 横 島 孝 雄

新年度の体制（令和元年5月号）

昨年後半からの軽米病院の状況をお知らせします。

医師不足で皆さんにご心配をおかけしましたが、昨年10月に内科医として魚谷先生が赴任されました。東京の出身ですが、前二戸病院長の坂本先生と一緒に働いたことがあり、そのつながりで軽米に来られました。

また、今年の4月に内科の漆久保先生が着任されました。自治医科大学卒業後の小規模病院ローテーションのため、9月までの6カ月間の予定です。

そのほかのスタッフでは、薬剤師が2人から3人になりました。これまで、県立病院の中で最も厳しく、休暇もとれない状況でしたが、今後は、病棟の薬剤管理、患者さんの服薬指導なども充実するものと思われま

す。また、昨年12月からの電子カルテの導入にあわせて、医師の業務をサポートする医療クラークが1名増えました。電子カルテの入力代行や書類作成のサポートをしてくれるため、医師の負担軽減に加えて、院内の業務が円滑に進むことが期待されます。

さらに、臨床検査技師が昨年から3人に増えて、夜間休日の救急対応がしやすくなりました。

対外的には、他院からの紹介患者さんも増えています。

年号が変わりましたが、軽米病院でも新しい体制で住民の皆さんの期待に応えていきたいと思

病院をどう支えるか（令和元年7月号）

住民代表の方々に当院の活動を紹介する地域懇談会が6月13日に開催されました。

病院からは、医師をはじめとするいくつかの部門でスタッフが増えたこと、入院の4割以上は町外からの患者さんであること、生活習慣病の予防活動にも力を入れていること、種々の資格取得を目指す職員が多いこと、次世代の医師確保が大きな問題であることなどが発表されました。

参加者からは、軽米病院でどんな検査ができるのか、初めて病院に来るとどう動いていいかわからない、他の県立病院で医師の患者さんへの対応が悪いという投書があったが、軽米病院は大丈夫なのか、他の市町村から来る患者さんで軽米病院を高く評価している人がいた等の発言がありました。

地元の住民としてどうやって病院を支えていけばいいのかという質問がありました。毎年町議会議員さんたちがボランティアを募って構内の環境整備に来てくれるのはとてもありがたい、病院は病棟が有効に利用されなければ機能しないので、入院の際に地元の病院を活用してほしい、と説明いたしました。

活発な意見が出され、われわれ病院のスタッフが力づけられた会でもありました。

決まった答えはないと思いますが、病院をどう支えていくのかを一緒に考えていただければありがたいと思います。

地域とつながる看護を目指して（令和元年9月号）

高齢者や介護が必要になった方が、住み慣れた地域で暮らし続けることを目的として「地域包括ケアシステム」の体制づくりが進められています。

慢性疾患で入院した場合、入院での治療が終わり退院となっても、病気を抱えながらの生活は続きます。病院でのケアのバトンが患者さんの生活する自宅や介護施設へとつながります。

したがって、病院での看護には、病気を治す「医療の視点」に加え、退院後の患者さんの日常生活を思い描きながら準備を進めていく「生活の視点」が求められています。病院勤務だけの経験では「生活の視点」すなわち在宅療養や介護施設での療養のイメージを捉えることが困難な状況です。

そこで、軽米病院では昨年度から、地域の介護施設や訪問看護ステーションのご協力を得て、施設や訪問看護の体験研修に取り組み始めました。

介護施設や自宅での療養場面を知ることで、入院中に何をしなければならぬのか、つなぎ先にどのような情報が必要かどうかを考え、実践していくことを目指しています。

今後も地域に出向き、それぞれの療養の場の事情を認識し、入院中の看護に生かすとともに、地域での暮らしを支える方々とのつながりを強めていきたいと思っています。

（軽米病院 総看護師長 伊藤ゆかり）

病院の機能（令和元年11月号）

先日、再編・統合の検討が必要な公立病院、公的病院が厚生労働省から発表され、岩手県の10病院の1つに軽米病院が挙げられました。

2017年に病棟ごとに高度急性期、急性期、回復期、慢性期の4分野いずれかに届けることになり、軽米病院の3階病棟を急性期として届けましたが、大きな病院の急性期病棟と比べて重症患者が少ないことがチェックされたものです。

もともと3階病棟には多彩な患者さんが入院しており、病院を1つの分野で届ける制度には無理がありました。

2017年には地域包括ケア病床を導入するなど、病棟内の急性期病床を減らして慢性期病床への転換を進めているところであり、すでに対応済みと考えています。知事の会見でも、現時点で大幅な再編は必要ないとの見解が示されています。

医療費抑制の流れもあり、中小病院の運営がますます厳しくなっている状況ですが、高齢者を支える地域包括ケアシステムの中心となるのは、専門の科に分かれた大きな病院ではなく、中小病院だと思われまます。

軽米病院は、一般病床(急性期)、地域包括ケア病床(回復期)、療養病床(慢性期)の3つの病床があり、いろいろな患者さんに対応できる体制ですので、その機能を十分に発揮していきたいと思えます。

新型コロナウイルス（令和2年4月号）

新型コロナの感染が世界中に拡大しているニュースが毎日報じられています。青森県初の感染者が八戸市で確認され、岩手に入ってくるのも時間の問題と思われまます。

感染者が多い地域に旅行した人、感染者や感染の疑いがある人と接触した人で、発熱、倦怠感が続く場合には、保健所に相談が必要です。無症状の感染者もいるため、ある程度感染が広がれば、知らないうちに感染することもあります。

予防としては、接触感染を防ぐためにこまめに手洗いするとともに、口、目、鼻を手でさわらないようにすること、飛沫感染を防ぐために感染者にマスクをかけたり感染者から2m以上離れることがあげられます。

感染者のそばを通りがかっただけでは感染のリスクはなく、短時間の会話を交わしただけの場合も感染リスクは低いとされています。

新型コロナと日常生活（令和2年6月号）

緊急事態宣言が解除された今、これからどういう生活をするかが問題です。誰か一人感染者がいても、他の人にうつさない状況を作ることが大切です。そのためには、マスクをつけることが一番です。感染者がマスクをつけ周囲もマスクをつけていれば、濃厚接触があっても感染リスクは低くなります。手洗い

の励行と不特定多数の人が集まる大規模の密集した集まりを当面避けることも大切です。

軽米の近隣を行き来しているうちは感染は起こりません。発熱があっても外との接触が無い場合はこれまで通りの診療となります。感染地域から来た人がいる場合には、注意が必要ですが、ほとんどの方が自己管理していますので差別は避けたいものです。

これからは感染対策をしっかり行いながら、徐々に以前の生活に近づけていく段階に入ったと思います。全国的に感染者がゼロになり、早く移動制限がなくなって欲しいものです。